

A Commentary on Domyo Ajari Syu(4)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柏木, 由夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/5786

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



『道命阿闍梨集』注釈（四）

柏 木 由 夫

又人に

91 わするなよわするときかばみくまのゝうらのはまゆふうらみかさ
ねん

【校異】 ○みくまのゝ―みくまのに（書²）

【他文献】 後拾遺集・雑一・八八五 詞書「熊野へ参るとて、人のも
とにつかはしける」、袖中抄、 後六々撰

【現代語訳】 また別の人に

私を忘れないで下さい。忘れたと聞いたならば、み熊野の浦の浜木綿
が重なるように、恨みを重ねますよ。

【語釈】

○わするなよ―旅に出て別れた時に用いる語。

昔、男あづまへ行きけるに、友だちどもに、道より言ひおこせけ
る。

忘るなよ―ほどは雲みになりぬとも空ゆく月のめぐり逢ふまで

（伊勢物語・十一段、拾遺集・雑上・四七〇）

かせ、わかれ

わするなよ別れちにおふる葛のはあきかせふかば今かへりこん
（是則集・四一、拾遺集・別・三〇六）

『道命阿闍梨集』注釈（四）

○みくまのうらのはまゆふ―「み熊野の浦」は、おおよそ三重県か
ら和歌山県にかけての海岸。「浜木綿」は海岸などに自生するヒガ
ンバナ科の常緑多年草。葉の付き方と群生することから、「重なる」
ものと詠まれる。『万葉集』巻四の柿本人麻呂詠を本にして多くの
歌がよまれた。また、名所屏風の画題ともされていた。

柿本朝臣麿歌四首

三熊野之 浦乃浜木綿 百重成 心者雖念 直不相鴨

みくまのの うらのはまゆふ ももへなす ころろはおもへど

ただにあはぬかも （万葉集・巻四・四九九）

み熊野の浦の浜木綿もも重なる心は思へどただに会はぬかも

（拾遺集・恋一・六六八・人麿）

屏風に、み熊野のかたかきたる所

さしながら人の心をみ熊野の浦の浜木綿いく重なるらん

（拾遺集・恋四・八九〇・兼盛）

み熊野の浦の浜木綿もも重ね心はあれど会はぬ君かな

（兼輔集・六八）

○うらみかさねん―「うらみ」は「み熊野の浦」に同音で導かれた。
いく返りつらしと人をみ熊野の恨めしながら恋しかるらん

（詞花集・恋下・二六九・和泉式部）

【評】 後拾遺集の詞書で明瞭なように熊野修行出立に際しての親しい人との別れの歌だが、『後拾遺集』雜一ではこの八八五に続く八八六・八八七はともに家集にない道命歌が並ぶ。

思はんと頼めたりける人の、さもあらぬけしきなりければ、詠みはべりける

忘れじと言ひつる仲は忘れけり忘れむとこそ言ふべかりけれ

(八八六)

久しうおとづれぬ人の許に

物は言はで人の心を見るからにやがてとはれでやみぬべきかな

(八八七)

これらについて、『和泉古典叢書 後拾遺和歌集』の注で川村氏は「作者を忘れた女への嫌味(八八六)」「訪れぬまま止む恋(八八七)」とし、異性への恋歌として理解している。同集恋部で道命歌は六首あり、そのうち三首は贈歌。僧侶歌人の恋歌の多くは題詠であるのに、道命に恋の贈歌が多いことは注目され、説話文学での道命につながるものが看取される。これらから類推すれば、九一の詞書の「人」も異性である可能性がある。

あすやまうづると、人のたまへるに

92 みやこ人みえばきみをばとひつべしけふゆくにこそわれをしられめ

【校異】 ○まうつる―まうする(書₁)、○きみをは―きみをも(谷)、○けふゆく―けふいく(書₂)、○しられめ―しられぬ(谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 明日には参詣するのですかと、人がおっしゃるので都の人が見えたら、きつとあなたを尋ねるでしょう。明日ではなく、今日行くからこそ私を知られるでしょう。

【語釈】

○まうづる―行先は不明。九一と関連するなら熊野。一二参照。

○人のたまへる―「のたまふ」は「言う」の最高敬語。「人」の身分の高さを示す。

○みやこ人―都にいる人。都の外からの用語か。『道命集』中での「都」は七首に見える。「都人」は二四八参照。

都びといかがと問はば山高み晴れぬ雲るに侘ぶと答へよ

(古今集・雑下・九三七・貞樹)

○けふゆくにこそ―「出立は明日ですか」との相手の問いに対して、「いや、今日です」と答えた。

○われをしられめ―都の人が都を離れた道命のことを知る、の意。更級やをばすて山に月見ると都にたれか我を知るらん

(千載集・羈旅・五二二・季通)

【評】 状況・人間関係不明。「みやこ人」が「人」に道命の消息を尋ねることか。特に五句の意図がわからない。

あまぶねにのりて

93 のればうくのらねばしづむわが身かななほかきながせあまのつりぶね

【校異】 ○しつ□―しつむ(書₁・書₂・谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 海士の船に乗って

船に乗って浮かび救われるが、乗らないと沈み救われない我が身だよ。そのまま私をすっかり苦海から流してくれ、法の船と見る海士の釣り船よ。

【語釈】

○あまぶね―海士船、または海女船。「あまをぶね」「あまのつりぶね」

も同じ。ここは、次に掲げる『金葉集』歌に同じく、「此経能救一切衆生」者……此経能大饒益一切衆生充滿其願……如子得母如渡得船（此経は能く一切衆生を救うものなり。……此経は能く大いに一切衆生を饒益して、其の願を充滿せしむる……子の母を得たるが如く、渡りに船を得たるが如く）（法華経・薬王菩薩本事品）に基づき、正しい悟りと極楽往生に人を導く乗り物とされる。大乘經典である『法華経』の教えをいう「法（のり）の船」に同じ意で用いた。

薬王品の心をよめる

うき身をし渡すときけばあまをぶねのりに心をかけぬ日ぞなき

（金葉集・雑下・六三九・懷尋法師）

皇嘉門院近江、世をそむきぬと聞きて申しつかはし侍るなり
人はみな苦しき海に沈むまで乗り浮かびぬるあま小舟かな

（師光集・一〇五）

○うく「浮く」。ここでは、仏教の教えに身を委ねて、極楽往生に向かう意。

宮の内侍よをそむかれぬとききしかばいひつかはしし

世をうみに沈みもはてであまを船浮かみ出でぬときはまことか

返し

あま内侍

さのみやは沈みはつべきあまを船うきよの岸をこぎもはなれず

（重家集・三六〇、三六一）

○しづむ―底本「む」脱。諸本で補う。「気持ちの晴れない状態におちこむ。物思いにふけったり、気がふさいだりする」（日本国語大辞典）。沈淪の述懐に用いられることが多い。恋歌では『金葉集』以後に見える。ここでは、すでに掲げた『師光集』歌や『重家集』歌と同じく、「浮く」に対立し、悟りの境地に至らないことを意味する。

除目のあしたに、命婦左近がもにつかはしける

年ごとに絶えぬ涙や積もりついでと深くは身を沈むらん

（拾遺集・雑上・四四三・元輔）

『道命阿闍梨集』注釈（四）

もらさばや細谷川の埋もれ水影だに見えぬ恋に沈むと

（金葉集・恋下・四七八・読み人知らず）

船ごとに法にこころをかけたれば苦しき海に沈みしもせじ

（経盛集・一一九）

○かきながせ―「かきながす」は「書き流す」の用法が多い。現実世界を表す苦海から流して浄土に導いてくれ、の意。

沈む水屑のはてはてはかき流されし

（拾遺集・雑下・五七四・兼家）

思ひやれ心の水の浅ければかき流すべき言の葉もなし

（詞花集・雑下・三六九・実行）

人知れぬ木の葉の下の埋もれ水思ふ心をかき流さばや

（千載集・恋一・六六一・実定）

【評】 同じ「あまぶね」を詠み、「浮く」「沈む」などの語が重なる和歌は他にも、

浮き沈み波にやつるあまぶねのやすげもなきはわが身なりけり

（惟規集・六）

のようにあるが、これは「加茂にて、或女に」とある一連の中の一首で恋歌と見なされるなど多様である。九三は道命の仏教者としての意識を反映した和歌として理解できる。

人の、歌おほうよみておこせたりし、返

94 これはみつえこそしらねわがこひはかきつくすべきかたしな

れば

【校異】 ○おほう―おほく（谷）、○えこそしらね―えこふしらね

は（谷）、○つくす―つくる（谷）

【他文獻】 なし。

【現代語訳】 人が、和歌を多く詠んでよこした返事に

お送りいただいたこれらたくさんさんの歌は見ました。しかし、私の気持ちをあなたに知られることはできません。私の恋は書き尽くせる方法がまったくないので。

【語釈】

○これはみつ一人のよこした多くの歌を見て、人の思っていることがよくわかった、とのこと。

○えこそしらね—自分の恋心を、歌を多くよこした相手に知られることは出来ないの意。九四が重出する二九四では「えこそ知らせね」（知らせられない）とある。

幾木ともえこそしらね秋山の紅葉の錦よそにたてれば

（忠岑集・八七）

○かきつくす—すべてを書き記す。平安時代末の和歌まで他に用いられていない。

寄り来べきかたも渚の藻塩草かきつくしてし和歌の浦波

（拾遺愚草・一二九八）

みちのくの言はで忍ぶはえぞ知らぬ書き尽くしてよ垂のいしぶみ

（新古今集・雑下・一七八六・頼朝）

○かたしなれば—「かた」は方法。「し」は強意。

惜しからで悲しきものは身なりけり憂き世そむかんかたしなれば

（貫之集・六〇五）

【評】 この歌は、二九四に二句「えこそしらせね」、五句「かたもなければ」で重出する。歌をよこした人の気持ちは多くの歌でわかったが、自分の心は歌に書き尽くせないと反論した。和歌としての言葉づかいにとらわれない道命らしい率直な表現の歌。しかし、僧の身で「我が恋」と言うことは注意される。詞書の「人」は道命の異性の恋人なのか否かも注意される。「歌おほうよみて」ということも不審である。あるいは、ある人が恋歌の連作か定数歌を送ってきたことへの返歌だろうか。そのように考えるなら、「恋」は現実上のことではないと言える。

正月つごもりに、人にやる

95 いますこしふかくもはるのなりなゝんはなみがてらにくる人やあらと

【校異】 ○はるの—春に（谷）、○人やあると—人やある（谷）

【他文献】 なし。

【現代語訳】 正月の末日に人に送った

もう少し深く春の季節が進んでほしいよ。そうなれば、花見に来るついでに私のところに来てくれる人もいるかと思うので。

【語釈】

○いますこし—口語的な言い回し。

あるきむだち、にはをかりて、みすとして

いま少し木繁き森のあたりに人は頼めにて雨漏らしけり

（赤染衛門集・六五）

これは、庭を刈りすぎ、雨宿りできなくした弁解の歌。

○ふかくもはるのなりなゝん—正月のうちは春の初めて花もまだ咲いていず、訪う客もない寂しさを解消したい思い。

散る花に塞き止めらるる山川の深くも春のなりにけるかな

（詞花集・春・四四・能宣）

○はなみがてらにくる人—花を見る楽しみが主目的で、そのついでに我が家に寄る人。

我が宿の花見がてらに来る人は散りなむ後ぞ恋しかるべき

（古今集・春上・六七・躬恒）

【評】 花見を目当てに来る人の訪れを待つという趣旨は、『古今集』以来珍しくはない。躬恒の歌もそうした気持ちで前提で詠まれ、道命も同様の範囲にとどまる。

春来てぞ人もとひける山里は花こそ宿の主なりける

（拾遺集・雑春・一〇一五・公任）

花もみな散りなん後は我が宿に何につけてか人を待つべき

或所に歌合するに、神祭と云題を

96 をとめごがをふるをものもろのゑはゆくすゑとほき人もきくら
ん

【校異】 ○云題を―いへるこゝろを(谷)、○をふるをもの―以下

欠(書) おへ(「つ」か)るおふりの(谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 某所で歌合を催した折に、神祭という題を

少女達の「をふるをもの(ふり)」の、共に重なったためでたい歌声は、
命長い人も聞くことだろう。

【語釈】

○神祭―『古今六帖』第一歳時部の夏にあるが、それは四月の賀茂の
祭。歌合一九一の『某年四月庚申西国受領歌合』及び『詞花集』
(夏・五四・兼昌)にもあるが、それも同じく夏の歌題。『和泉式部
集続集』(三二五～三三一)には「十二月、人のもとより、詠みに
おこせたりし」として、「雪・氷・冬山・神祭・千鳥・電(あられ)
・水鳥」の連作がある。すなわち、

神祭

神山と榊をさして祈るかな常葉のかぎり色も変へじと(三二八)
の如くだが、これは、

十一月神祭

おく霜に色もかはらぬさかき葉は香をやはひとのとめてきつらん
(貫之集・一七)

に同じく、神楽を詠んだもの。『道命集』も九七以下、千鳥・あら
れ・奥山とあって、同時詠の可能性もある。とすると和泉式部と道
命に関して、ここまでの『道命集』で唯一の接点となる。

一方『平安朝歌合大成 五』の資料増補では、道命のこの一連を

『道命阿闍梨集』注釈(四)

歌合一一三『(寛弘四・七年)冬 傳大納言道綱歌合』のものとする。
同歌合は『千載集』と『長能集』によって、千鳥・氷・雪・月
の各題による長能歌が知られるが、これらは冬の歌題として一般的
なもので、道命歌もこの歌合のものとするにはためらわれる。
○をとめご―神楽に舞を奉仕する巫女で、歌も歌ったか。

かぐらしはべるところ

山人のたける庭火のおきあかしゑゑあそぶかみのやをとめ

(能宣集・三七)

○をふるをもの―「をふるをふり」ともに意不明。「をふる」は舞の
所作としての「袖ふる」の誤写の可能性はどうか。能宣集歌に拠っ
て考えると、少女の歌うことに関することだろう。

をとめごが袖ふる山のみづがきのひさしきよより思ひそめてき

(拾遺集・雑恋・一二一〇・柿本人麿)

○もろゑ―単独ではなく重ねた声。

八月ばかりに、月のあかき夜、御ことどもしらべたまふに、

むしのいとあはれになきければ、女御

虫のねもかきなすことももろゑにみにうらもなき月をさへみる

(斎宮女御集・一六四)

○ゆくすゑとほき人―長寿の人。「行くすゑ遠し」は距離・時間に用
いるが、ここは後者だろう。

きくのはな、女みるところ

秋ふかき人にはいとどきくのはなゆくすゑとほきつゆぞおくらむ

(元輔集・三三)

【評】 第二句が不明なため一首全体の解釈は出来ない。

千鳥

97 よはにくる人もあるかといでゝみよまへのかはべにちどりなくな
り

【校異】 ○よはにくる人も―よはかくれ人の（谷）、○まへのかはへ―
まへのゝ野へ（谷）

【他文献】 なし。

【現代語訳】 千鳥

こんな夜更けにやってくる人がいるかと家の外に出てごらんさい。
人はいないで、前の川辺に千鳥が鳴いているよ。

【語釈】

○千鳥―海浜や河原に群れている小形の鳥。『万葉集』以来、冬の夜
更けの静寂の中に寂しげに響く鳴き声が詠まれた。

ぬばたまの夜の更けゆけば久木おふる清き河原に千鳥しば鳴く

（万葉集・巻六・九三〇・赤人）

夜くたちて鳴く川千鳥うべしこそ昔の人も忍ひ来にけれ

（同・卷一九・四二七一・家持）

思ひかね妹がりゆけば冬の夜の川風寒み千鳥鳴くなり

（拾遺集・冬・二二四・貫之）

○よはにくる人もあるかといでてみよ―夜更けに人が訪れたのか、家
の外の確認を促す。

くらぶ山こずゑも見えでふる雪に夜半にこえくる人やたれども

（新撰和歌・冬・四八）

出でてみよいまは霞もたちぬらん春はこれよりすぐとこそきけ

（後拾遺集・春上・二一・光朝法師母）

○まへのかはべ―「○○の前のかはべ」あるいは、「○○のかはべ」
と客観的に認知できる場を示すのではなく、単に「前の」とだけ示
すことは、作者自身が立ち会っている具体的な場を前提とする表現
であり、和歌表現だけで完結した世界を提示する題詠としてはユニ
ーク。

俊綱朝臣さぬきにて綾河のちどりをよみはべりけるによめる
霧はれぬ綾の川辺に鳴く千鳥こゑにや友のゆくかたをしる

（後拾遺集・冬・三八七・藤原孝善）

妹がりと佐保の川辺をわが行けば小夜か更けぬる千鳥鳴くなり

（千載集・冬・四二四・長能）

【評】 戸外からの気配に人の訪れかと不審に思い、確かめた結果判明
したのは千鳥の鳴き声だったと詠んだ。冬の夜更けの侘びしさや寂し
さの象徴として千鳥が詠まれている。千鳥の詠としては伝統的な設定
だが、上句を含めて主観的な詠風の題詠となっている点に注目される。

おなじ

98 ちどりなくうらへはゆきもやられぬをいかなるなみのたちかへる
らん

【校異】 ○やられぬ―やられぬを（書¹・書²・谷）、○なみの―なみ

か（谷）

【他文献】 なし。

【現代語訳】 同じ

千鳥が鳴く浦のあたりは行き過ぎることはできないが、どのような波
が寄せては返すのだろう。

【語釈】

○うらへ―「浦へ」とすると「へ」は到達点を示すので、「ゆきもや
られず」に続く、「千鳥が鳴く浦へ」は通り過ぎる事が出来ない」
となる。下句で千鳥の声から離れる波を不審としていて、上句では
波と対比的に作者が千鳥の鳴いている場から離れられないことを表
している筈だから、「へ」を助詞とすると作者の位置と千鳥の位置
は別とされるので文脈上そぐわない。「川辺」と似た「浦辺」か。
「浦辺」なら、その初出例。

五月雨は海人の藻塩木くちにけり浦辺に煙絶えてほど経ぬ

（千載集・夏・一八五・安芸）

○ゆきもやられぬ―「ゆきやる」は「行くことを続ける。多く打ち消

しの語を伴って用いる」(日本国語大辞典)。千鳥の鳴き声に惹かれて浦辺を通り過ぎる事が出来ない、の意と見る。

ゆくゆくとも見れども飽かぬ秋の野はゆきもやられずとまるともなし
(古今六帖第二・秋・一一五・伊勢、伊勢集・二四二)

○いかなるなみー波が寄せては返すことを、人の心がとどまることに對比して、非難めいて言うことが定型化している。

松見れば立ち憂きものを住江のいかなる波か静心なき

(後拾遺集・雜四・一〇六五・為長)

住吉と聞くに心はとどまるをいかなる波の立ちかへるらん

(新統古今集・羈旅・九九九・成仲、成仲集・九九)

心のみとまる三島の渚よりいかなる波の立ちかへるらん

(經正集・一〇九)

【評】 前歌に同じく、千鳥の声を賞美する旅人の思いと解す。「波」を擬人化して詠むが、成仲・經正の歌は九八の影響歌か。

99 たまのをのみだれたるかともえつるはたもにかゝるあられなり
けり

【校異】 ○たまのをのーたまのを (書²)

【他文献】 なし。

【現代語訳】

数珠の紐が切れ、玉が乱れ散ったかと思えたのは、袂に降りかかる霞だったよ。

【語釈】

○たまのをのみだれたるー「玉」は宝石。「緒」は玉を繋げる紐。古くは、玉は魂に通じ、緒は肉体を魂に結びつけるものとされ、「玉の緒」で命を意味するとされる。また、緒が切れやすいとして「絶え」の、玉が散乱するとして「乱る」の枕詞でも用いられる(『歌

『道命阿闍梨集』注釈(四)

ことば歌枕大辞典)。ここは、数珠の紐が切れて玉が散り乱れる情景のイメージ。

したにのみこふればくるし玉の緒のたえてみだれむ人などがめそ

(古今集・恋三・六六七・友則)

○たもにかゝるー平安時代の和歌では、袂は菖蒲をかける、または涙に濡れるところとして詠まれることが「袂」を詠む和歌全体『新編国歌大観』で一一八首の約半数で、九九のように叙景に用いられることは希か。

ことありて播磨へまかりくだりけるみちより五月五日に京へ
つかはしける

世の中のうきにおひたる菖蒲草けふは袂にね(根・音)ぞかかりける

(後拾遺集・雜三・九九四・藤原隆家)

夏衣うすきたもにおちかかるなみだはしばしとまらざりけり

(元真集・二五〇)

いでや猶人だのめなるあられかな袂しけども見るほどもなし

(堀河百首・霞・顯仲・九三四)

○あられー『万葉集』では、…寒い夜の孤独感をつのらせるもの…玉のごとく美しいものとして歌われている(『歌ことば歌枕大辞典』)。

かきくらし霞ふりしけ白玉をしける庭とも人のみるべく

(後撰集・冬・四六四・読み人知らず)

ふりかかる音におどろく霞かな旅のやどりの板屋なればか

(長暦二年(一〇三八)源大納言家歌合・八・宮内)

【評】 歌題を欠くが、内容より「霞」と知られる。袂に涙ではなくかかって散った霞の様子を、数珠の緒が切れ玉が乱れて散った様に譬えて、情景の美しさを描いた。降る霞を緒が切れて散乱する玉に喩えることは、『古今集』以来の定型。

……寒く日ごとに 成り行けば 玉の緒とけて こき散らし 霞
乱れて 霜氷…… (古今集・雜体・一〇〇五・躬恒)

100 又これはみぎのかたに
したぎえにたかねのゆきやとけぬらんみぎはまされるやまがはの
みづ

【校異】 ○みつ―たき（谷）

【他文献】 なし。

【現代語訳】 また、この歌は、右方の勝に
底の方が消えて高嶺の雪が解けたのだろう。汀が高くなっている山川
の水だよ。右がまさっているよ。

【語釈】

○又これはみぎのかたに―歌合の場で、右方が優れていることを示し
た判の歌であることを示す。

○したぎえに―下の方、または底の方の雪が解けて消える。八代集で
は次の一首のみ。

かきくらし降る白雪のしたぎえに消えて物思ふころにもあるかな

（古今集・恋二・五六六・忠岑）

○たかねのゆき―高嶺は雪深い所とされる。

としふかくふりつむ雪を見る時ぞふじのたかねにすむ心ちすれ

（古今六帖第一・雪・七三四）

花いみじうさきたるころ、山ざとにゆきのふるをみて

雪さえぬ山のたかねにすむ人はみやこの花をなにとみるらん

（道命集・一六六）

降り積みし高嶺の深雪とけにけり清滝川の水の白波

（新古今集・春上・二七・西行）

○みぎはまされる―「汀まされる」で雪が解けて山川の水高が増した
の意に、「右はまされる」を懸けた。

山川の汀まされり春風に谷の水は今日や解くらむ

（和漢朗詠集・氷付春氷・三九〇）

○やまがはのみづ―氷（冬）、や水量の変化（春）、落葉（秋）など山

の季節の変化を象徴する。浅い流れとされる。

紅葉ばの色をしそへて流るれば浅くも見えず山川の水

（拾遺集・秋・一九四・読み人知らず）

浪かくる岩まひまなく垂る氷して氷とちたる山川の水

（堀河百首・凍・九九七・顕季）

【評】 内容的には立春の「東風解氷」「礼記」「月令」の類型だが、
歌合の判を和歌で表したものとされる。一〇〇に似た判の歌の例は以
下のように見える。

底の石の現れて行く水無瀬川みぎはの劣るしるしなりけり

（一条大納言為光石名取歌合・三）

いとどしくみぎはまさりて見ゆるかな荒磯波も心寄すれば

（同・一一）

左右引く手もたゆくたつ糸はいづかたへかは寄るべかるらん

（万寿二年（一一二五）義忠歌合）

いづれとも思ひわかれず藤袴我も心にしまぬ匂ひは

（長治元年（一一〇四）広綱後番歌合）

しかし、歌合の判歌としては、そのための歌合で出された左右の歌も
示されず、九九・一〇一は無関係と見られ、極めて不自然な配列。ま
た、道命が歌合で判者を務めることがあったとすることも他見のない
こと。元来は前後の冬歌群に加えた早春の山河の景を描写した歌に対
し、後人が歌合での判歌とも読めるとの添え書きをしたものが本文化
したものかとも考えられる。

おく山

101 ともすればまづおもひたつおく山はみちもなきまでつらゝるにけり

【校異】 ○おもひたつ―こゝろたつ（谷）、○おく山は―おく山の

〈ミセケチ「は」〉(谷)、○つらゝゝるに□りーつらゝゝるにけり
(書¹・書²) つららしにけり(谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 奥山

折にふれてすぐに思い立って行く奥山は、道も隠れてしまうほど氷が張っているよ。

【語釈】

○おく山―人里から離れた奥深い山で、和歌では孤独感を伴い、俗世からの逃避の場としても詠まれる。歌題としての例は他にない。

『道命集』の歌中では、二六・一〇八・一五五・二〇九・二一〇に出る。

○ともすれば―ひょっとすると。たまたまあり得ること。

ともすれば四方の山辺にあぐがれし心に身をもまかせつるかな

(後拾遺集・雑三・一〇二〇・増基)

○おもひたつおく山―山を指す心の背景には厭世的な心情が推測される。

世のなかのうきたびごとにおもひたつ山路もみえず雪ふりにけり

(清輔集・二〇五)

○みちなきまで―何かに覆われ、道が隠れる状態が詠まれる。

我が宿は道もなきまで荒れにけりつれなき人を待つとせしに

(古今集・恋五・七七〇・遍昭)

あかずして帰る深山の白雪は道もなきまで埋もれにけり

(統後撰集・恋三・八三五・朝光、朝光集・一〇二)

○つらゝゝるにけり―「つらら」は、平らに張った水。勅撰集では『後拾遺集』の初出語。「つららゝる」の例は多いが、すべて道命以後。

冬来ればつららに見ゆる石山の氷はかたき物と知らなん

(重之集・二九〇)

てる月の光さえゆく宿なれば秋の水にもつららるにけり

(金葉集三奏本・秋・一八八・皇后宮撰津)

『道命阿闍梨集』注釈(四)

【評】 厭世的心境から奥山をめざしながら道を覆う氷に阻まれた状況を詠む。上句は日常語的表現で奥山への心寄せを述べ、下句で奥山での厳しい自然の発見を示している。題詠だから隠者を設定した上での作歌とすべきだが、道命の日常的境地をある程度反映すると見るべきだろう。

山でらにまかりて、花をみて

102 うしろめたやまのさくらをみるほどにみやこの花はちりやしぬらん

【校異】 ○花をみて―花をみし(谷)、○ほど□―ほどに(書¹・書²・谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 山寺に出かけて、桜の花を見て
気になることだよ。山の桜の花を見ているうちに、都の花は散ってしまふのだろうか。

【語釈】

○山でら―『道命集』に頻出するが、特定出来ない。

○うしろめた―「気がかりであること。また、気がとがめること」(日本国語大辞典)。ここでは前者の意。

石山の堂のまへに侍りけるさくらの木にかきつけ侍りける

うしろめたいかで帰らん山桜あかぬ匂ひを風にまかせて

(拾遺集・雑春・一〇五三・読み人知らず)

○やまのさくらをみるほどに―山の桜は人里より遅く咲くとされるので、咲く時は春の末が近い。

里はみなちりはてにしをあしひきの山のさくらはまだちらずけり

(躬恒集・四〇一)

いとまなみ山辺の桜見るほどに春はあだなる名ぞ立ちぬべき

（赤染衛門集・三七七）

○みやこの花はちりやしぬらん―異郷から都の花への気がかりを言う。
春ともに行く船路にも思ふかな都の花は散り果てぬらん

（公任集・四三五）

【評】一首の趣向は「山の桜」を見つつ「都の花」を思ふ点にある。
このような同時点での山と都の差異に関心を持った歌い方には、次のようなものがある。

み山には松の雪だに消えなくに都は野辺の若菜つみけり

（古今集・春上・一九・読み人知らず）

都にも初雪降れば小野山の真木の炭釜たきまざるらん

（後拾遺集・冬・四〇一・相模）

道命歌では、一〇一との繋がりで見ると、望んで山に入っても心は都に残っていることを示唆している。根本は、都人であるとの意識による。

とほき花をみて

103 あさゆふにこゝろをそらになす物はよそなる花のこずゑなりけり

【校異】なし。

【他文献】なし。

【現代語訳】遠くにある花を見て

朝夕に、心を空に夢中にさせるものは、遠くにある桜の花の梢だったよ。

【語釈】

○とほき花―遠山桜は、桜を詠む和歌の一典型。

とほき山花をたつめといふ心をよめる

山ざくら心のままにたつねきてかへさぞみちのほどはしらるる

（後拾遺集・春上・九一・小弁）

○あさゆふ―一日の明るい時間帯の初めと終わりに、毎日、いつも。

あさゆふに思ふ心は露なれやかからぬ花の上しなければ

（後拾遺集・秋上・三三〇・良運）

○こゝろをそらに―「われを忘れて。夢中で」（日本国語大辞典）。

「心を空になす」で「われを忘れさせる」の意。

春ごとに心を空になすものは雲井に見ゆる桜なりけり

（詞花集・春・二五・戒秀）

○よそなる花―「よそなる」は距離が遠いとともに、心理的にも離れていること（無縁）を表す。ほかに「よそなる鶴」（拾遺集・雑恋・一二四七）「よそなる人」（拾遺集・雑秋・一一一六、同集・哀傷・一三〇三）の例はある。「よその…」は『新古今集』に多い語。それを詠むことで逆に対象を気にすることの強さを示す。

春にあはぬ人にあはじと思へばやよそなる花も遅く咲くらん

（道濟集・一二）

思ひ出づる後の心にくらぶ山よそなる花の色は色かは

（拾遺愚草・一一六三）

二首目は、暗部山の花の美しさに比べれば、他の花の色など問題ではないの意。

○こずゑ―「空」と縁語。

紅葉散るおとは時雨の心地してこずゑの空はくもらざりけり

（後拾遺集・冬・三八三・家経）

【評】「よそなる花」を、離れているあこがれの対象とする。例えば、

やまとに侍りける人につかはしける

こえぬまはよしのの山のさくら花人づてにのみきさわたるかな

（古今集・恋二・五八八・貫之）

のように状況説明があれば、花を人の比喩とする恋歌としても成り立つ。花は桜を指し、戒秀歌に用語も構想も重なる。影響を受けているか。戒秀は清原元輔の男子で、清少納言の兄。花山院殿上法師であり、正暦年間成立の『花山法皇東院歌合』に参加している（和歌大辞典）。

道命とは花山院に親近することによる結び付きがあったか。

よの中の、いとはかなふきこゆるころ

104 あだなりとなげかれなく山ざくらよよのはかなさをいかにきくら
ん

【校異】 ○よのなかの―世の中（谷）、○よのはかなさを―世のはかなさそ（谷）

【他文献】 なし。

【現代語訳】 世間の人の命が、ひどく短く心細いと言われているところ当てにならずはかない物と嘆かれはしないのだが、山桜は今の世の中のはかなさをどのように聞いているのだろう。

【語釈】

○よの中のいとはかなうきこゆるころ―疫病などによる人々の死が続いたころの意。「世の中のはかなきことを思ひける折に菊の花を見て詠みける」（古今集・秋下・二七六）、「世のはかなき事を言ひて詠み侍りける」（拾遺集・哀傷・一三二六）、「世の中はかなくて右大将通房かくれ侍りぬと聞きて」（後拾遺集・雑一・九〇〇）

世のなかのいとはかなきころ、むかしさぶらひし所より
いかがせんいかが言はましひぐらしのなきても余る世のはかなさを
（馬内侍集・一九四）

○あだなりとなげかれなく山ざくら―「あだ」は「一時的でかりそめな様、いかげんでおろそかな様、不誠実で浮気っぽい様」（日本国語大辞典）。山桜を擬人化する。一〇四は二九六に重出するが、二句は「なげかれながら」とある。桜については、その方が一般的。「山ざくら」は、山野に自生する桜。人里よりも遅く咲く。ここは「山桜なので遅く咲いていて、桜はかないものだ」と嘆かれぬが、その山桜も」の意となる。

『道命阿闍梨集』注釈（四）

あだなりと名にこそ立てれ桜花年にまれなる人も待ちけり

（古今集・春上・六二・読み人知らず）

【評】 二九六に二句「なげかれながら」で重出する。通常は桜がはかないとされるものの代表だが、人里から離れ遅く咲く桜を擬人化し、今の世の中のはかなさをどう思うだろうと問うている。それは桜からしてもはかないと判断される世の中の確認を意味しているのだろうか。桜の擬人法は、

ことしより春しりそむるさくら花ちるといふ事はならはざらなむ
（古今集・春上・四九・貫之）

を始め少なくないが、こうした問いかけは類例が見えない。咲いてすぐ花を閉じる朝顔を擬人化して、人の世の無常を強調した例として、あさがほを何はかなしと思ひけん人をも花はさこそ見るらめ

（拾遺集・哀傷・一二八三・道信）

があるが、一〇四も同様の主張と見られる。

105 わがやどの花ならねどもちるときはよそのこととおぼえざりけ
り

【校異】 ○よそのこと□も―よそのことゝも（書₁・書₂・谷）

【他文献】 なし。

【現代語訳】 我が家の花ではないが、（世の無常が言われる時だけに）花が散る時は他人の家のことと思えない悲しみを感じるよ。

【語釈】

○わがやどの花―我が物として愛着し接してきた木の花。
庭のさくらのちるを御らむじてよませたまひける

我が宿のさくらなれどもちるときは心にえこそまかせざりけれ
（詞花集・春・四一・花山院御製）

○ちるとき―美しさの失われることが惜しまれる時とされる。

紅葉ばの風のまにまにちるときはみる人さへぞしづこころなき

(躬恒集・三三八)

梅の花にほひにほひてちる時はかくすににたる雪ぞふりける

(貫之集・四七二)

○よそのこと―自分には無縁なこと。一〇五では「わがやど」と対比されつつ、対比が成り立たないことを主張している。

今よりはただ行くすゑの松風をよそのことと思ひなしてん

(斎宮女御集・一六九)

よそながら惜しき桜の匂ひかな誰我が宿の花と見るらん

(後拾遺集・春上・一一五・坂上定成)

宿ならでをちにさけどもさくら花ちるをばよその物とやはみる

(堀河百首・桜・一四五・公実)

【評】一〇四と同様に、世のはかなさが強く思われる時、はかないものの代表である花に寄せて、通常以上に花の散る悲しみを痛切に感じて詠んだものか。すなわち、花の美しさへの常の哀惜だけでなく、世の無常に一層あはれを刺激されて下句の感情吐露となったか。花山院歌との初句三句の一致も偶然とも見えず注意される。連続させれば、花の美しさの失われることは我が物でも思うに任せず、他の物でも惜しむことを禁じ得ないとなり、花の美への愛着は一貫する。

やはたの臨時祭のかへさの日、夜ふけにければ、定頼の少将
のおくりしける車に、かうぶりおとしたりける、又の日やる
とて、人の

106 かくれたるまことやありしちはやぶるかみもあはれになりける
かな

【校異】なし。

【他文献】なし。

【現代語訳】八幡の臨時祭の還立の日、夜が更けたので、定頼の少将は帰りの送りをした車に冠を落としてしまった。翌日、冠を返すというところで、人が送った

常人には見えない石清水八幡の神様の真意ではないが、あなたは冠の中には隠れている本当の姿があったのか。霊威ある神ならぬ頭の髪が、むき出しになって情ない様になったことですよ。

【語釈】

○やはたの臨時祭のかへさの日―石清水八幡宮の祭。三月中の午の日。

「かへさの日」は祭りの翌日未の日、還立（かへりだち）という。

祭りの使いや舞人・楽人が宮中に帰り、盃酌及び禄を受ける。舞人が求子（もとめご）を舞って後、人々は退出する（江家次第）。

○定頼の少将のおくりしける車に―定頼は、藤原定頼。長徳元（九九五年）年寛徳二（一〇四九）年。父は公任。妹の一人は藤原教通妻で後朱雀天皇女御生子の母。四条中納言と呼ばれた。右近少将、蔵人頭を経て権中納言に至る。美声で能書家。『上東門院菊合（長元五年）』『賀陽院水閣歌合（同八年）』に出詠。道命のほか、藤原範永・伊勢大輔らとの交友があり、小式部・大式三位・相模らとの恋愛が知られる。『御堂関白記』寛弘七年（一〇一〇）三月十二日条に定頼が八幡の臨時祭の舞人になっており、この贈答歌はその折に詠まれたものか。還立の宴で夜遅くなり、祭の舞人だった定頼は、彼を送った車に冠を忘れた。人がそれを返す時に添えたのが一〇六の歌だろう。

○かうぶりおとしたりける―落冠露頂は恥とされ、清原元輔が賀茂祭の折に落馬して冠を落として人々に笑われた話（『今昔物語』二八―六、『宇治拾遺物語』一六二）、藤原実方が口論に激して藤原行成の冠を投げ捨て、そのために陸奥守に左遷された話（『古事談』二―三二、『十訓抄』八一―）は有名。道命の父道綱が飲酒の上で舞って落冠し、嘲った右大臣藤原顕光に放言した話（『古事談』一一二、

『続古事談』一一六もある。

かみなくなりたる人の、えぼうしをわすれて、又の日こひに
おこせたるやるとて

これなくてよごとにかでありつらん舎人のねやと人もこそいへ

(道命集・二八三)

○かくれたるまこと―日頃冠の下に隠れている頭髮の様子を、神事に
際しての和歌なので、神の日ごろ表されない真実によそえた。

何事も夢とのみ見る世の中に神のまことぞうつつなりける

(壬三集・一三四〇)

○かみもあはれ―「髪」と「神」を懸けた。冠が落ちてあらわになっ
た頭髮の無様なことを言う。石清水八幡宮の神に寄せた諧謔的な歌
い掛け。

年をへて祈るしはちはやぶるかみもあはれときかざらめやは

(実方集・二四五)

【評】三保サト子氏は、「定頼が車の中に冠を落としてしまった。翌
日、その冠をかえすに当たって、ある人が詠んでやった歌が一〇六番
である。「人の」とあるので、道命とは別の誰かの作である。返歌は、
冠の落とし主である定頼のものと解される」(『道命阿闍梨伝考―晩
年の軌跡―』『論考 平安王朝の文学―一条朝の前と後―』稲賀
敬二編著 平成十年十一月 新典社)とされ、なお詳しく考察してい
る。三保氏のように考えると、この贈答に道命は関わっていないこと
になるが、それがなぜ『道命集』に収められているか大きな疑問が生
じる。確たる根拠はないが、一〇六は「人」への道命の代作と考える。
あるいは、道命と定頼と「人」の親しい関係から、直接に道命が関わ
りあることではないが、道命の知人の面白い話題として収めたという
ことかもしれない。道命と定頼との関係は、定頼父公任を介するもの
かと推測される(参照 拙著『平安時代後期和歌論』第二編第二章
「藤原定頼年譜考」平成十二年十月 風間書房)。

かへし

107 も、しきのこのゑのみかどすぎざまにかざしのはなもちりにける

かな

【校異】 ○みやとーみかと(谷)、○すきさまーすきまさ(書₂)す

きしま(谷)、○はなも□□□□□□□□□□はなもちりにけるか
な(谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 返事

神楽歌に「巾子(こじ)落つ」とあって、冠を落とすとされる陽明門
を通り過ぎる時に、冠に挿した花も散り落としてしまいましたよ。

【語釈】

○このゑのみかど―大内裏の東側中央にある陽明門。門の内側に左近
衛府がある。「みやと」は「みかと」の誤写と考え、谷山本で訂す。

○かざしのはな―舞人は「以呉竹為挿頭」(江家次第)とあり、藤原

実方が、その創始とされる『古事談』一一三〇、『十訓抄』一一二

〇。一方、『物具装束抄』の「挿頭花事」には、「臨時祭之時、使
藤、舞人 桜、…」ともある。

石清水のりうじの祭の使ひに、ためまきの朝臣のありけると
し、舞人にて、かへりての又の日、かざしのはなにさして

桂川かざしのはなの影みえし昨日のふちぞ今日はこひしき

(実方集・二二)

○ちりにけるかな―底本文。谷山本で補った。古風な言い方。通常
の落花に寄せる寂しさは、ここでは表面的で、冠を車に忘れる以前
の失策を言っている。

あしひきの山の端てらす桜花このはるさへにちりにけるかな

(赤人集・一五五)

をりにくと人やつげけん山里にのこらず花はちりにけるかな

(道命集・一九六)

【評】 神樂歌「本 近衛の御門に巾子落つと 末 髪の毛のなければ」を踏まえる。「神樂歌では、髪の毛がないので近衛の御門（陽明門）で巾子を落とすとあるが、私は挿頭の花まで散らしたことですよ」の意。作者は定頼。贈歌で神事に寄せていたのに併せて神樂歌を基に応じた。

108 小法師にて、師におくれて、山寺にて
めにもみずおとにもきかぬおく山ををしへおきけるきみはいづちぞ

【校異】 ○小法師―又法師（書²）

【他文献】 なし。

【現代語訳】 小法師で導師にこの世を先立たれて、山寺で目に見ることもなく、話にも聞いていない比叡山のことを、教え導いて下さった師は、どちらにいらっしゃるのだろう。

【語釈】

○小法師にて、師におくれて、山寺にて―道命の出家について、『和歌大辞典』『日本古典文学大辞典』は、「幼にして叡山に登り天台座主慈恵大僧正の弟子となる」とするが、三保サト子氏は「道命法師伝考―飯室妙香院をめぐって―」（『源氏物語の内と外』風間書房 昭和六十二年十一月刊）において、『大日本史料』正暦元年（永祚二年・九九〇）二月十四日の太政官牒として延暦寺妙香院の七禪師に「傳燈大法師位道命 年十七 鵬三」とあることにより、永祚二年の三年前である永延元年（九八七）の妙香院入室と推定された。また、同記により、道命は父道綱の叔父に当たる尋禪の入室の弟子とされる。この尋禪は、この太政官牒が出た三日後の二月十七日に入滅しており、一〇八はこの時の詠。「おくれて」は死別し残されたことを表す常套語。ここでの「師」は尋禪。「山寺」は道

命が供僧となった妙香院。また『道命集』中の「山寺」について三保氏は、この妙香院か、後に道命が阿闍梨となった摠持寺かとされる。

○めにもみずおとにもきかぬ―視覚と聴覚を対にして、出家入室以前は仏の世界である比叡山と全く無縁で未知であったことを強調する。秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

（古今集・秋上・一六九・敏行）

こがくれてたぎつ山水いづれかは目にしも見ゆる音にこそきけ

（後撰集・恋四・八六一・読み人知らず）

橋柱なからましかは流れての名をこそ聞かめ跡を見ましや

（後拾遺集・雑四・一〇七二・公任）

○おく山―詞書の「山寺」のこと。人の住む世俗と隔絶した世界というイメージがある。

見る人もなくて散りぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり

（古今集・秋下・二九七・貫之）

飛ぶ鳥の声も聞こえぬ奥山の深き心を人は知らなん

（古今集・恋一・五三五・読み人知らず）

来る人もなき奥山の滝の糸は水の沸くにぞまかせたりける

（後拾遺集・雑四・一〇五五・定頼）

○をしへおきける―道命の師の尋禪が、生前仏道について教え導いたこと。

をしへおくその言の葉を見るたびにまた問ふ方のなきぞ悲しき

（千載集・哀傷・五九〇・実定）

物ごとに住み憂き家を出でよとぞひとつの門ををしへおきける

（殷富門院大輔集・二八八）

○きみはいづちぞ―哀傷の類型的表現。

ふるさとに君はいづらとまちとはばいづれのそらの霞といはまし

（後撰集・哀傷・一四一五・読み人知らず）

君がいにし方はいづれぞ白雲の主なき宿と見るが悲しき

【評】 この歌は道命十七歳時の作。師の死にあって、出家當時を思い起こし、そのときと同じ前途への不安にかられ、亡き師を求める心の切なさを歌っている。

(後撰集・哀傷・一四一六・清正)

三月つごもりに、人のきたるに

109 はるはすぎなつはまだこぬゆふぐれのつれぐなるにきたるはるか
な

【校異】 ○つこもりに―晦日の日に(谷)、○きたるに―きたる(谷)、

○はるかな―きみかな(谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 三月末に、人が来たので

春は過ぎて、夏はまだ来ない夕暮れの何もすることなく寂しい時に訪れた春ですよ、あなたの訪れは。

【語釈】

○はるはすぎなつはまだこぬ―古い季節と新しい季節の隙間に生ずる
気持ちの空白(つれづれ)を意識した。

としはこえて春はまだこぬに、人のもとに

としはこえ春はまだこぬ山里のそのつれづれをおもひやれきみ

(道命集・三)

○ゆふぐれ―人恋しい時とされるが、ここでは、まさに春の終わりの
日だから恋しさがひとしお増している。

惜しめども春の限りの今日のまた夕暮れにさへなりにけるかな

(後撰集・春下・一四一・読み人知らず)

日暮しの鳴く山里の夕暮れは風よりほかに訪ふ人もなし

(古今集・秋上・二〇五・読み人知らず)

○つれづれ―「単調で気の紛れることがない状態。(中略)孤独で物

『道命阿闍梨集』注釈(四)

寂しいこと。」(小学館『古語大辞典』)

たらちねの諫めしものをつれづれとながむるをだに訪ふ人もなし

(新古今集・雑下・一八二一・和泉式部)

○きたるはるかな―訪れた人を「春」と表現した。勅撰集・私家集では次の義懷詠と『道命集』の二首のみが同表現。義懷詠は『栄華物語』(さまざまの別れ)にも載るが、これについて「久しくありてぞ、世におのづからより聞こえたりし」とある。花山院に繋がる道命と義懷との親昵に係する表現か。

こむといひてこぬ人に、春たつ日

今こむといひし人だに見えなくにおもひのほかにかきたる春かな

(道命集・一)

法師になりて住み侍りける所に桜の咲きて侍りけるを見て

見し人も忘れのみゆく故郷に心長くも来たる春かな

(後拾遺集・雑三・一〇三四・義懷)

【評】 惜春の寂しさが人の訪れで和らげられ、その喜びから再度の春の訪れかと詠んだもの。『道命集』の一・三を重ねて見ると、夏を待つ心の空白というより、春への思いの強さが大きいと思われる。春の到来は人の訪れや様々の喜びで詠まれる。

正月一日、二条の後の宮にて白き大うちきを賜りて

降る雪の蓑代衣うち着つつ春来にけりと驚かれぬる

(後撰集・春上・一・敏行)

大井河にうかぶかゞりをみて

110 久方の月のかつらのちかければほしとぞみゆるかゞりびのかげ

【校異】 ○月―くも(谷)、○かつら―かたつら(書?) ○かゞりひ

のかげ―瀬々のかゞりは(谷)

【他文献】 新拾遺集・夏・二八一「大井川の篝火を見て」第五句「瀬々

の篝火」

【現代語訳】 大井河に浮かぶ鵜船の篝火を見て
月にあるという桂の木と同名の桂の里が近いので、星とばかりに見えるよ、篝火の光は。

【語釈】

○大井河に浮かぶかぶりー大井河は、すでに九・一三・一五・三二に出る。道命の住んだ法輪寺至近の川。鵜飼は屏風絵にも見える夏の景物。大井河は鵜飼の名所だった。「かぶりびのかげ」は、篝火の炎が輝く光をいう。

六月鵜飼

かがり火のかげしるればうば玉の夜河の底は水も燃えけり

(貫之集・一〇)

鵜河

大空にあらぬものから川上に星とぞ見ゆる篝火のかげ

(同・一五二)

大井川浮かべる船の篝火に小倉の山も名のみなりけり

(後撰集・雑三・一二三・業平)

大井川いく瀬うぶねの過ぎぬらんほのかになりぬ篝火のかげ

(金葉集・夏・一五一・雅定)

○久方の月のかつら―月には桂の木が生えているとされる中国古来の伝説による表現。用例は多く、八代集中には七例ある。

久方の月の桂も秋はなほ紅葉すればや照りまさるらん

(古今集・秋上・一九四・忠岑)

【評】 上句は常套句で、下句は貫之詠をそのまま用いたもの。表現に独創性がまったくない歌だが、別個にあった上句と下句を必然性のあつた結び付きに仕立てた点が手柄だろう。つまり、鵜飼いの場が桂の里に近いことから、月が連想され、その縁で篝火を星に例えた。それが一首の趣向の要。

やへざくらををりて人のみするに、ある人のもとにかくれるて、うちよりとて車をかりにおこせたりしに、いひやりし川こゝのへのうちとの心ある人をひとへにのみまたのみけるかな

【校異】

○やへざくらををりて―やへざくらをりて(書一・谷)、○みする―みる(谷)、○ある人のもと―ある人／＼のもと(谷)、○をこせたりしにいひやりし―おこせて待しに(谷)

【他文献】

【現代語訳】 八重桜を折って人が見せる時に、その人はある人の許に隠れていて、内裏からだと車を借りによこしたので、言い

やった

自分にも他人にも配慮できる心のある人をひたすら信頼したことですよ。

【語釈】

○やへざくらををりて……いひやりし―状況がきわめてわかりにくく、以下に一説を示す。八重桜を折って見せてくれる人がいたが、その人はある人の許に隠れていながら、内裏からだと偽って八重桜を持ってくるための車を借りに使いをよこしたので、その人に言い送った、とのことか。あるいは、

一条院御時、奈良の八重桜を人の奉りて侍りけるを、そのをり御前に侍りければ、その花を賜ひて歌詠めと仰せられければ詠める

いにしへの奈良の都の八重桜けふ九重にほひぬるかな

(詞花集・春・二九・伊勢大輔)

の如き状況が宮中であり、「人」が、当時の京の都では珍重すべき下賜の八重桜を贈るのだと偽り、車を借りようと装ったか。

○こゝのへ―「内裏(うち)」を導く。八重の縁語。「ひとへ」に對す。

内裏にて人を訪ね給ひければ、女

八重垣にひとへまされる九重にあだなる人は訪ねしもせじ

(元良親王集・一一八)

○うちとの心―「うち」は詞書の内裏(うち)に寄せた措辞。「内外」

は、「①内側と外側。内部と外部。奥向きと表向き。私的と公的。

②(―する)許された奥向きに出入りする。」(日本国語大辞典)とある。「内外の心」の用例はないが、「(女三宮は)なほ内外の用意多からず(やはり、自分にも他人にも思慮が足りず)」(『源氏物語』若菜上)とあるのに準じて、自分と他人への配慮と解する。

○ひとへにのみまたのみけるかな―「ひとへに」は「ひたすら」の意。「八重」「九重」に合わせた表現。「たのみけるかな」は多く用いられる表現。

下野やふたこの山のふたころありける人をたのみけるかな

(古今六帖第二・山・九〇七)

【評】一首は、親しい間柄での諧謔であることは勿論だが、欺こうとした友人に対して、八重桜から九重・一重の連想を趣向にして非難することが主題。八重桜は『道命集』で他に六二に見えるが、道命が人に八重桜を贈るとする。それは『新古今集』に入っていて、人が贈ってくるとするので、一一に状況が近似する。

八重桜を折りて、人の遣はして侍りければ

白雲の立田の山の八重桜いづれを花とわきて折りけん

(新古今集・春上・九〇・道命)

あるあまの、人のもとに、あめにふりこめられて、ゐたりと
きゝてやりし

112 つねはいさかへすゝもけふをこそあまごもれりといふべかりけ

れ

【校異】 なし。

【他文献】 なし。

『道命阿闍梨集』注釈(四)

【現代語訳】 ある尼が、人の許で雨に降り籠められて、留まっている

と聞いて送った

いつもは、さあどうでしょうか、わかりませんが。いくら考えても今日は特に、尼が雨で籠もっているのだから、「尼籠もり」と言うのが当然ですよ。

【語釈】

○あめにふりこめられて―ひまなく降る雨のために外に出られない状態。

戒仙が深き山寺に籠り侍りけるに、こと法師まうできて、雨に降りこめられて侍りけるに

いづれをか雨とも分かむ山伏の落つる涙も降りにこそ降り

(後撰集・雑二・一一三三・読み人知らず)

○つねは―日頃の意。ここは「けふ」と対比する。

五月、菖蒲ふける所を、をとこ馬ひかせて見る

わが駒のつねはすさめぬ菖蒲草ひきならべてはけふこそは見れ

(恵慶法師集・八)

○いさ―下に「知らず」などの否定的語を省略した。

人はいさ心もしらずふるさとは花ぞ昔のかににほひける

(古今集・春上・四二・貫之)

○かへすゝ―①繰り返し繰り返し。なんども。②どう考えても。

③ひとえに。ひじょうに。④ねんごろに。ていねいに。」(日本国語大辞典)のうち、ここでは②の意。通常、田・衣・波の縁語として用いる。

○あまごもれり―「雨籠り」に「尼籠り」を懸ける。「雨籠り」は万葉語で、中古和歌の他の例は未見。「尼籠り」は、尼が修行で寺に籠っていることらしいが、他の例なく、道命の造語か。あるいは、「雨」から「尼」への転換は、『蜻蛉日記』で作者の鳴滝籠もりからの帰還を兼家が評した「尼帰る(雨蛙)」と関わる表現かもしれない。

雨隠三笠の山を高めかも月の出で来ぬ夜は更けにつつ

(万葉集・巻六・九八五・安倍朝臣虫麻呂)

【評】 尼が雨籠りをしたことを、修行のため籠っているようにとりなしたのが、一首の趣向。初句の「つねはいさ」には「日ごろは熱心に修行に励んでいるかは知らないが」という、軽いからかいの気持ちが見え込んでいる。雨に降られ塞いだ気分を明るくする効果もある。

十二月つごもりの日、あふさかこえしに

113 めにみえばとぶらはましをあらたまのとしもせきよりけふやこゆらん

【校異】 ○つこもり―晦日(谷)

【他文獻】 なし。

【現代語訳】 十二月末の日、逢坂関を越えた時に年が人のように目に見えるならば訪ねたいのだが、新年も逢坂の関から今日越えて来るのだろうか。

【語釈】

○あふさか―逢坂の関。山城国と近江国の境に位置し、東国への都からの出入り口に当たる。

これやこのゆくも帰るも別れつつしるもしらぬも逢坂の関

(後撰集・雑一・一〇八九・蟬丸)

○とぶらはまし―「年」を擬人化して、それを私が訪ねよう、との意。同じ時に都に入る者として挨拶したい、あるいは新年の喜びを交わしたいの意を示す。

我が庵は三輪の山本恋しくはとぶらひ来ませ杉立てる門

(古今集・雑下・九八二・読み人知らず)

○としもせきよりけふやこゆらん―「年も」は「自分と同じく年も逢坂の関を越える」の意。新年が逢坂の関を越えて来るとの発想は間々

見られる。

あらたまの年はけふあすこえぬべし相坂山を我やおくれん

(後撰集・恋六・一〇七四・藤原ときふる)

待つ人は来ぬと聞けどもあらたまの年のみ越ゆる会坂の関

(同・雑四・一三〇三・読み人知らず)

あらたまの年に任せて見るよりは我こそ越えめ会坂の関

(新古今集・恋一・一〇〇五・伊尹)

【評】 道命が歳末に逢坂の関を越えて都に入ることがあった時に詠んだ歌だろう。当時は、『礼記』(月令)で「孟春之月」にある「東風解凍」に基づいて、春は東方から訪れると考えられていたので、都に入る旅が新年の訪れと重なったことをやや諧謔的に詠んだ。入京に新年が重なった心の弾みがあるか。

歳内に節分あるとし、かたゝがへにものへまかりて、月をみて

114 あらたまのとしはしらねどありあけの月はかはらぬものにぞ有ける

【校異】 ○歳内―年中(谷)、○節分ある―節分する(谷)、○ものへ―ものに(谷)、○しらね―しらね(書₁・書₂)、すぐれ(谷)

【他文獻】 なし。

【現代語訳】 年内に節分がある年、方違えへである所に出掛けて、月新年は変わるか知らないが、方違えをしても有明の月は変わらないものだ。

【語釈】

○歳内に節分あるとし―「節分」は立春・立夏・立秋・立冬の前日。ここでは立春の前日で、年内立春(旧年立春)だったことを示す。

それはほぼ二・三年に一度ある（『日本暦日便覧』参照）。年内立春は、『古今集』巻頭歌が有名で、それは春部に属すが、歌題として最も早く見える『永久百首』では冬部に属す。

歳内立春ころを詠める

年の内に春立つことを春日野の「若」なさへにも知りけるかな

（金葉集初奏本・春・一・貫之）

栗田のおとど、まだ弁にておはせし時に、ふるとしに節分の

はじめにて侍し日、梅の花を詠ませたりしに

枝分けて匂ひやすらん梅の花としのうなる春のしるしは

（兼澄集・四六）

○かたゝがへ―陰陽道の思想に基づく。人が外出の折に、天一神（なかがみ）などのいる方角に重ならないように、前夜に吉方（えほう）の家に泊まって、方角を変えてから目的地に向け出発すること。節分の方違（節分違）については、「方角神の大將軍神は三年ごとの立春の日、王祖神は四季ごとに所在の方角を変え遊行する…貴族たちはあらかじめ行動の自由を得るために、節分の夜にしばしば方違を行った」（『平安時代史事典』「節分」項）とある。次に掲げる『蜻蛉日記』下巻での道綱から八つ橋の女への和歌や、『枕草子』などの例を見出せる。

旧年に節分するを、「こなたに（方違）の意」などいひせて、

いとせめて思ふ心を年の内にはるくことも知らせてしがな
返りごとなし。（蜻蛉日記・下巻〈天延二年十二月〉）

すさまじきもの。…方たがへにきたるに、あるじせぬ所。まい
て節分などはいとすさまじ。（枕草子）

節分違へなどして夜ふかく帰る、寒きこといとわりなく、おとが
ひなど落ちぬべきを、からうじて来着きて、火桶ひき寄せたるに、
火のおほきにて、つゆ黒みたる所もなくめでたきを、こまかなる
灰の中よりおこし出でたるこそ、いみじうをかしけれ。（枕草子）
○あらたまのとしはしらねど―「あらたまの」は「年」の枕詞。「年

『道命阿闍梨集』注釈（四）

は知らねど」の「知る」が、何についていうのか不明瞭。第四句と対照させていると見れば、年については変わるかわかわらないか知らないが、の意となる。ここは年内立春の代表歌

年の内に春はきにけり一年を去年とやいはむ今年とやいはむ

（古今集・春上・一・在原元方）

の三句以下を言い換えたと考える。すなわち年内立春によって新年になったか旧年のままとまどっている古今集歌に対して、どちらとも言えないと応じたのではないだろうか。二句の異文「年は過ぐれど」だと、

年過ぐる山辺な籠めそ朝霞こそは春とともに立つとも

（永久百首・旧年立春・顯仲）

の場合と同じく、もうすぐ過ぎて変わるはずだが、の意とすべきかと考える。

○月のはかはらぬ―①方違えて場所が変わっても、空の月是不変変わらないままの意、あるいは②暦上の月も、空にある有明の月の美しさも変わらないの意とも考え得る。①の方が②より詞書との対応はよいが、上句との対比が成り立たない。②では、暦上の年と月の対応が成立する。この場合、方違えの和歌への反映は、「ありあけ」にあると考える。それは、『枕草子』に「節分違へなどして夜ふかく帰る」とあり、記録類でも方違えの折は、夜更けや早朝に帰るとあることと一致する（ベルナル・フランク著『方忌みと方違え』参照）。月が時空を越えて不変だとすることは、和歌に多く詠まれている。月の明かく侍りける夜、小一条のおほいまうち君、昔を恋ふる心を詠み侍りけるに詠める

天の原月は変はらぬ空ながらありし昔の夜をや恋ふらん

（後拾遺集・雜一・八五二・元輔）

【評】三〇〇に、第二句「としはすぐれど」第四・五句「月のかはらぬことぞあやしき」で重出する。たまたま旧年立春の前日の方違え先で見えた有明の月について単純に見たままを詠んだか。

115 おくれたるわが身をなげくをり／＼にさきだつものはなみだなり
けり

をば、うすたまへりしころ

○をば、うすたまへりしころ―「叔（伯）母」か。道命の父道綱にとつて腹違いだが姉妹として知られるのは、冷泉天皇女御超子、円融天皇皇后詮子、三条院東宮尚侍綏子などである。上村悦子氏は「道命阿闍梨年譜」で、寛弘元（一〇〇四）年二月七日に没した綏子を「をば」の該当者とする（『傳大納言道綱の妻妾・子女考』日本女子大学紀要十八 昭和四四年三月）。道命と晩年の三条院との関係から推測すれば可能性は大きい。別に、「おば（祖母）」の意で、道綱母の可能性も指摘されている。道綱母の没年は長徳二年（九九五）五月上旬で、道命二十二歳の時。その推測の背景には『道命集』の歌と『蜻蛉日記』との関連が指摘されている（三保サト子「道命の歌―道綱母と花山院の存在を通して―」仁愛女子短期大学紀要第一七号 昭和六一年三月）。

【校異】 ○うす―うせ（書₂・谷）

【他文献】 なし。

【現代語訳】 おばが、亡くなられたころ

死に後れた我が身を嘆く折につけて、まず流れてくるものは涙だったよ。

【語釈】

○をば、うせたまへりしころ―「叔（伯）母」か。道命の父道綱にとつて腹違いだが姉妹として知られるのは、冷泉天皇女御超子、円融天皇皇后詮子、三条院東宮尚侍綏子などである。上村悦子氏は「道命阿闍梨年譜」で、寛弘元（一〇〇四）年二月七日に没した綏子を「をば」の該当者とする（『傳大納言道綱の妻妾・子女考』日本女子大学紀要十八 昭和四四年三月）。道命と晩年の三条院との関係から推測すれば可能性は大きい。別に、「おば（祖母）」の意で、道綱母の可能性も指摘されている。道綱母の没年は長徳二年（九九五）五月上旬で、道命二十二歳の時。その推測の背景には『道命集』の歌と『蜻蛉日記』との関連が指摘されている（三保サト子「道命の歌―道綱母と花山院の存在を通して―」仁愛女子短期大学紀要第一七号 昭和六一年三月）。

○おくれたるわが身をなげく―大切な人との死別によって、思うに任せず生き残る我が身に苦しんでいる。

親しかりける人のみまかりにけるによめる

おくれじとおもへど死なぬわがみかな一人やしらぬ道をゆくらん

（千載集・哀傷・五五三・道命法師）

白波の立ち返りくる数よりも我身を嘆くことはまされり

（赤人集・一〇九、千里集・一二〇）

悲しきはおくれてなげく身なりけり涙のさきにたちなましかば

（和泉式部統集・七三）

○さきだつものはなみだなりけり―八八に同じ措辞。「先立つ」は八五・一五八にも見える。ここでは「おくれ」と対照させた点が趣向。

末の露下の雫や世の中の遅れ先立つためしなるらん

（新古今集・哀傷・七五七・遍昭）

先立たむことを憂しとぞ思ひしに遅れてもまた悲しかりけり

（千載集・哀傷・五九八・静縁法師）

心にはそむかんとしも思はねど先立つものは涙なりけり

（清少納言集・三八）

【評】 上句は道命の千載集歌の内容にほぼ重なり、下句は清少納言詠に同じ。全体は和泉式部詠が表現・内容共にほぼ重なる。「をば」を綏子とすれば、道命とともに天延二（九七四）年生まれの同年である。道命の心の奥に同年の叔母への格別な喪失感も想像される。逆に祖母である道綱母だとすると、『蜻蛉日記』との関連も指摘され、道命の祖母への意識は小さくなかったとも言えようが、祖母の死に際して孫である道命が「おくれたるわが身」とまで、あえて言うだろうかとも思われる。

秋、山寺にまかりこもりて、しば／＼ありて人に
あきかせのはげしき山にいりしよりあゆぶくさばにつけてかなし
も

【校異】 ○しば／＼―しばし（谷）、○あゆふ―あふく（谷）

【他文献】 なし。

【現代語訳】 秋、山寺に詣でて籠もって、そうしたことが何回かあつて人に送った

秋風が激しく吹く山に入ってから、揺らぐ草葉につけても悲しいこと

だよ。

【語釈】

○しばくありて―「しばく」は、「たびたび」の意。山に籠もることが数回になったの意と解する。

○はげしき―山に吹く秋風の厳しさをいうが、山寺での修行の厳しさをも象徴する。形容詞の「はげし」は、八代集では『後拾遺集』に左掲の一首、『千載集』に二首（俊頼）、『新古今集』に一首（国基）あるのみで、希な語。私家集では、『好忠集』『大斎院前御集』『大斎院御集』『重之の子集』『国基集』『馬内侍集』各一首、『惠慶集』『赤染衛門集』『山家集』各二首、『散木奇歌集』八首。

月はよし激しき風の音さへぞ身にしむばかり秋は悲しき

（後拾遺集・秋下・三三九・斎院中務）

○山にいりし―山籠りの修行。

身を捨てて山に入りにし我なれば熊の食らはむこともおぼえず

（拾遺集・物名・三八二・読み人知らず）

○あゆぶ―「歩む」に同じとされる（日本国語大辞典）。和歌の例は僅少で、次に掲げる『散木奇歌集』の他、『今昔物語』『狭衣物語』などに例がある。紛らわしい語に、「あゆく」がある。その中には「あゆく草葉」の「露」を詠む例が多く、諸注釈は「あゆく」を「動く、揺れる」と訳す。同例は以下に掲げるもの以外に『教長集』『拾玉集』にもある。それらと「あゆぶ」とする『和泉式部集』『出観集』の例は違うのか、同じなのか。同じと見て、「あゆぶ」にも「（風に）揺れる」意があると解す。

吹く風にあたり空を払はせて一人もあゆぶ秋の月かな

（散木奇歌集・四九七）

消えぬべき露の我身は物のみぞあゆぶ草葉に悲しかりける

（和泉式部集・八八六）

（随喜功德品）衆罪如霜惠日能消除

はかなくてあゆぶ草葉に置く露の照らす日影に消えざらめやは

『道命阿闍梨集』注釈（四）

（出観集・七五七）

とほく行く人に、あふぎをとらすとて

手にならす扇の風を添へたらばあゆく草葉につけて忘るな

（赤染衛門集・六〇六）

分別品 若坐若立、若経行廻

たちるにもあゆくくさばのつゆばかり心をほかにちらさずもがな

（聞書集・一八）

すまのうらや 藻しほたれけん 人もなほ 今をみるには …か

なしさは あゆくくさばに 袖ぬれて ことばの露は …

（長秋詠藻・五八三）

修行にまかりありきける時よめる

思ひかねあくがれ出でてゆく道はあゆく草葉に露ぞこぼるる

（千載集・雑中・一二二・覚禪法師）

○つけてかなしも―「悲しも」は古代的表现。吹く風に悲しさを誘われるとされることは多く詠まれている。

世中はいかにやいかに風の音をきくにつけてもものや悲しき

（伊勢集・三〇七）

【評】 四句の解については、なお考察が必要だろう。一首は秋の山寺での修行の厳しさによる寂しさ辛さを歌う。

絵に、臨時祭したるかたかきたるかたはらに

117 をとめごがかざす日かげのかずそひてかゞみの山はてりまさらん

ん

【校異】 なし。

【他文献】 なし。

【現代語訳】 屏風絵に、臨時祭をしている姿を描いた脇に添えた五節の舞姫の翳す日蔭の蔓のために、日の光がいくつも加わって鏡の

山は輝き勝るのだろう。

【語釈】

○絵に臨時祭したるかた―「臨時祭」は一〇六にも出る。三月の石清水臨時祭と、十一月の賀茂臨時祭がある。『上代倭絵年表』に拠ると、『貫之集』『忠見集』『順集』『万代集』などに月次屏風の例があるが、それらはすべて賀茂臨時祭。内容としては神儀への祝意を詠み、藍摺りの小忌衣が歌材となっている。

冬の賀茂のまつりのうた

千早振る賀茂の社の姫小松万代ふとも色は変はらじ

（古今集・東歌・一一〇〇・敏行）

延喜御時、賀茂臨時祭の日、御前にてさかづきとりてかくてのみやむべきものか千早振る賀茂の社の万代を見む

（後撰集・雑一・一一三一・定方）

右大臣恒佐家屏風に、臨時祭かきたる所に

足引きの山藍に摺れる衣をば神に仕ふるしとぞ思ふ

（拾遺集・雑秋・一二四九、貫之集・三七二）

十一月、賀茂臨時祭みるくるま

千早振る賀茂の川霧さるなかにしるきは摺れる衣なりけり

（順集・一八二）

○をとめごがかざす日かげ―「日蔭」は「日蔭の鬘」で、神事祭礼奉仕の時に物忌みの印として冠に掛け垂れる白糸または、青糸などを組んで作った物。「日かげ」は日の光をも意味する。和歌では「五節」の折に用いる場合が大多数で、ほかは大嘗祭の折。賀茂臨時祭とは小忌衣を用いる点では共通するが、同祭で「をとめ」の登場も「日蔭の鬘」を用いたことを示す資料もない。

五節の所にて、閑院のおほい君につかはしける

ときはなる日蔭の鬘けふしこそ心の色に深く見えけれ

（後撰集・恋三・七三五・もろまさの朝臣）

をとめごが挿頭す日蔭の名にし負はば曇らぬ豊の明かりともがな

日蔭草かがやく影や紛ひけん真澄の鏡くらぬものを

（相模集・二七三）

（後拾遺集・雑五・一一二一・長能）

右の中で特に用語が重なる『後拾遺集』の長能詠が詠まれた事情については『栄華物語』（初花）や『紫式部日記』にも詳しい。つまり、寛弘五年十一月の五節の時、弘徽殿女御義子に仕える女房に彰子方の女房が「箱の蓋に、銀の扇に蓬萊の山つくりなどして、挿し櫛に日蔭の鬘を結び付けて」ともに送った和歌が、

多かりし豊の宮人さし分けて著き日蔭をあはれとぞ見し

（後拾遺集・雑五・一一二一・読み人知らず）

で、その後賀茂臨時祭になり、彰子の弟である藤原教通が祭の使いとなった時に、使いが用いる「沈の櫛、銀の笄、金の箱に鏡など入れて」添えた返歌が一一二二である。同歌中の「日蔭草」は、贈歌の語を用いたもので、「鏡」は教通への贈り物を読み込んだもの。五節は十一月中の丑の日から辰の日までで、賀茂臨時祭は同月最後の酉の日で、時期がすぐに重なるため、たまたまこのような例も生じたのである。

○かぐみの山―「鏡山」に同じ。近江国の歌枕。志賀県蒲生郡竜王町と野洲郡野洲町の境にある。三上山の東にある山。賀茂社や臨時祭との関連は格別ない。「鏡」「影」「照る」は縁語。「日蔭」に「日光」を懸け、「鏡」の明るさに寄せている。

かがみ山やまかきくもりしぐるれど紅葉は猶ぞてりまさりける

（古今六帖第二・山・八八一・素性）

紅葉する鏡の山の月影は光ことにぞ照りまさりける

（保安二年忠通歌合・一〇・道経）

【評】一首の内容は、賀茂臨時祭とは関わらず、五節の舞姫の輝きによって一層輝く鏡山のためたさを詠んだもの。臨時祭の絵の「かたはらに」書き添えたとは、単に和歌が書かれた位置を示し、和歌の内容には関わらないか。なぜ二つの別な行事が重なったかは、『後拾遺集』

歌のような行事の時期が近接していたことが関わるかもしれない。

人のかういひたりし

118 わがやどはみやこのくまかほととぎすなどこゝをしもよきておとせぬ

【校異】 ○かういひたりしーやういひたりしに（谷）

【他文献】 なし。

【現代語訳】 人が、このように言ってきた

私の住まいは都の物陰なのか。時鳥は、どうして、ここを格別避けて、鳴かないのか。

【語釈】

○わがやどはみやこのくまか―「隈」は、入り組んで見えにくい所。奥まった所。八代集では「心の隈」か、「隈なし」として月を詠むかのどちらか。

思ふてふ人の心のくまごとにたちかくれつつ見るよしもがな

（古今集・雑体・一〇三八）

我が宿は都の異しかぞ住む世をうち山と人も言ふらん

（古今六帖第二・山・八八五・喜撰法師、古今集・雑下・

九八三 初句「我が庵は」五句「人は言ふなり」

○などこゝをしもよきておとせぬ―「しも」は強意の副助詞。「よきて」は、「避けて」の意。時鳥が訪れず、声を聞けないことを恨む歌は多い。

時鳥などか来鳴かぬ我が宿の花橘の実に成る夜まで

（躬恒集・四三二）

夏草は茂りにけれど時鳥など我が宿に一声はせぬ（仁和御集・七）
郭公まつ時なかずこの暮れやしづくをおほみ道やよくらん

（古今六帖第一・しづく・五九四・貫之）

『道命阿闍梨集』注釈（四）

【評】 二一五に重出。詞書「ほととぎすなかぬに、人のもとより」初句「我が里も」五句「わきて音せぬ」。二一五と合わせてみると、単純に時鳥の声を聞きたいが聞けない知人からの訴えと思われる。一一八は他人歌だが、時鳥は『道命集』中で重複を除いても四〇首で詠まれており、注目すべき題材で、その鳴き声を期待する歌も多い。

かへし

119 こゝろにぞくまはありけるほととぎすさてたれにかはおとづれはする

【校異】 なし。

【他文献】 なし。

【現代語訳】 返事

心にこそ隠れたところはあるもの。時鳥は、それにしても、誰に訪れるのか。

【語釈】

○こゝろにぞくまはありける―人に秘めて知られない本心があること。

秋の夜の月の光はきよけれど人の心のくまはてらす

（後撰集・秋中・三三三・よみ人しらず）

○たれにかは―誰に対してか……。「かは」は疑問と反語の両用があるが、ここは疑問と解すべきか。

うきよをもまたたれにかはなぐさめん思ひしらずもとはぬ君かな

（後拾遺集・恋三・七四六・和泉式部）

○おとづれはする―「おとづれ」は、時鳥が鳴いて飛来する時の常套表現。擬人法。

我が里にまだおとづれぬほととぎす遠山かけていまぞなくなる

（長保五年（一〇〇三）左大臣家歌合・二七・為時）

五月雨の頃になりてぞ時鳥音羽の山に訪れはする

【評】 二二六に重出。一一八で時鳥が訪れないのは自分の住まいが「都の隈」なので場所が悪いせいかと質問して、訪れの無さを嘆いてきたことに対して、一一九は、「隈」は住まいにあるものではなく人の心にこそあるもので、訪れない事は住まいのせいではないとし、時鳥が一体他所のどこに行くのかわからないと答えている。真意がつかみがたい一首である。初二句は一般論なのか、相手独自のことから、前者なら、心の隈など時鳥に知れるはずもないから、時鳥が来ない理由にはならないだろう、それにしても時鳥は誰の所に行くのだろう、となるか。一方、後者ならかなり露骨な言いがかりとも読める。

あさ日山といふをみて

120 うちはへてあさ日の山のやまびとはくるゝもしらずながめをぞする

【校異】 なし。

【他文献】 なし。

【現代語訳】 朝日山という山を見て
いつまでもずっと、朝日の山の山人は朝日が続くとして、日が暮れるのも知らないで眺め続けるよ。

【語釈】

○あさ日山―一般的には、京都府宇治市で、宇治川北岸にある山を言う。但し、『道命集』二七七に、

いざ行きて朝日のたけに宿からん小倉の山は春暮れにけり

とあり、小倉山の近くに位置する山と解するとすれば、右京区の愛宕山の最高峰朝日峰とも考えられる。「其山（愛宕山）有五岳、一曰朝日岳建白雲寺」（『日本歴史地名大系』所引『扶桑京華志』）。一二二に「小倉山」が詠まれ、一二〇の詞書が実体験を示すようなの

で、こちらが妥当かと思われる。

○うちはへて―空間的、または時間的に、ずっと続くこと。ここでは「山人」の「眺め」の長さについて言うので後者。「はへ（延へ）」と「くる（繰る）」は縁語。

伊勢の海の海士のつりなは打ちはへてくるしとのみや思ひ渡らむ

（古今集・恋一・五一〇）

○やまびと―薪を切り出したり、炭を焼くなどして山に住む民。獵師や山中で修行する出家者にも言う。神事に関わることもある。

山人の樵れるたぎは君がためおほくの年をつまんとぞ思ふ

（後撰集・慶賀・一三八〇・太政大臣忠平）

○くるゝもしらず―「朝日山」との縁で日光の明るさを言う。一首の趣向の中心。

月影の夜とも見えず照らすかな朝日の山を出でやしぬらん

（能因集・一五九）

○ながめをぞする―通常、恋歌で用いられることが多く、思いにとらわれつつぼんやり目をやるという内容だが、一二〇にはそうした思いはない。

花みてゐたる家

野も山もみるべきものを我がやどの花をながめて日はくれにけり

（中務集・二三）

つれづれと思へば長き春の日に頼むことはながめをぞする

（後拾遺集・恋四・七九八・道信）

【評】 朝日山は、その名に従って常に明るいはずとの主張を詠んだ。二七七の一首と同じく、次の一二二に出る小倉山との対照をなす。